

眼科用患者 説明アプリ



眼科診療現場における コミュニケーションロボットの活用

アプリ開発の経緯と背景

富山大学附属病院 林 篤志 教授が監修
眼科診療現場における看護師補助アプリを開発

このアプリは、眼科患者に対し、症状や入院案内などの質問に何度も繰り返し答える看護師を補助するものです。富山大学附属病院 林 篤志 教授との共同研究で開発がスタートしました。まず、発症件数が多く、知らせることが多岐にわたる白内障患者に、症状や手術前説明を適切に行えるよう開発を進めてきました。白内障はレンズである水晶体が白く濁り、物が見えにくくなる病気ですが、加齢に伴って誰でも発症する病気です。2025年には団塊の世代が75歳を超えるため、今後ますます増えることが予測されます。その後、病気や症状の幅を広げ、眼科全体で使えるように開発を進めてきました。

アプリの利用価値

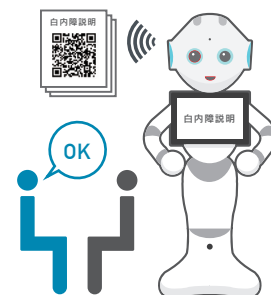
眼科の診療現場では、患者は診察や説明の時間より待合室で待機する時間が長く、看護師は多くの患者と接しています。そのため、患者が看護師に対し、「説明内容を細かく確認する」「手術の関連事項を追加で聞く」といったことがやり辛い状況にあります。そんな状況を解決するため、患者が気兼ねなく質問でき、看護師の作業補助となるコミュニケーションロボットを活用するアプリを開発しました。

コミュニケーション ロボットの活用と取組

眼科の診療現場では、患者は診察や説明の時間より待合室で待機する時間が長く、看護師は多くの患者と接しています。そのため、患者が看護師に対し、「説明内容を細かく確認する」「手術の関連事項を追加で聞く」といったことがやり辛い状況にあります。そんな状況を解決するため、患者が気兼ねなく質問でき、看護師の作業補助となるコミュニケーションロボットを活用するアプリを開発しました。

コミュニケーションロボットの活用方法

- 該当するQRコードを患者へ渡す。
説明が始まるまで看護師がサポート。
- 患者に説明を聞いてもらう。
- 説明が終わったタイミングで理解したか確認する。

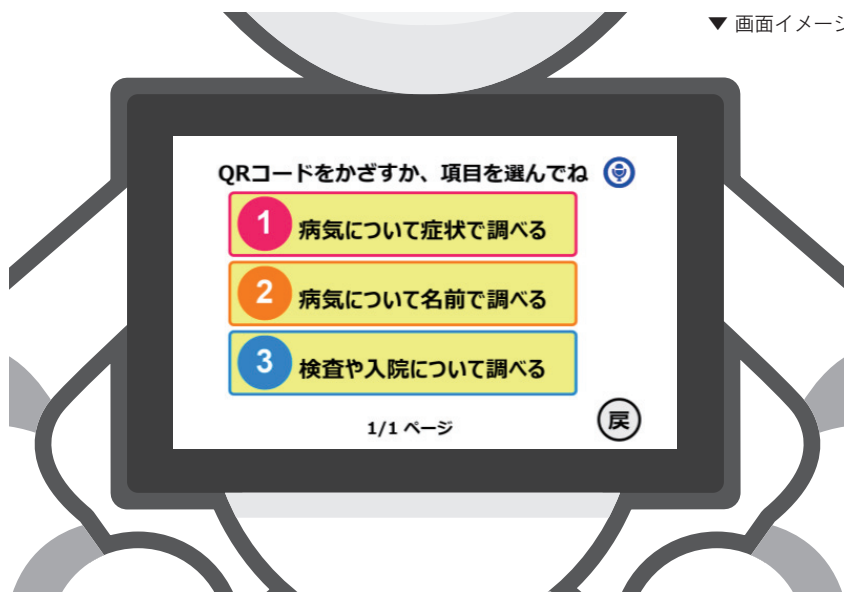


眼科用患者説明アプリ

利用の流れ

基本的な操作

「説明選択画面」は選択肢で表示され、画面をタッチすることで説明が始まります。説明中は静止画を利用したスライドショーに合わせてロボットが説明します。



眼科診療の現状

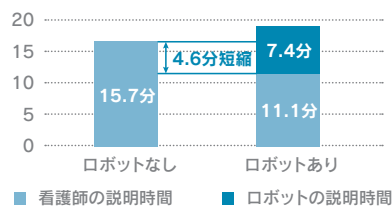
看護師は病状・入院・手術の説明を、1人1人の患者に何度も繰り返し行うため、精神的苦痛を伴います。また、1人に説明する間、他の多くの患者に対応することができません。

QRコードによる即時説明

手動で探すことも可能ですが、何層かの手続きがあり、少し時間がかかります。そのため、QRコードが描かれたカードを準備しました。看護師は患者にカードを渡し、コミュニケーションロボットへかざすところまでサポートします。病気は病状と名前から調べることができます。また、理解度に応じて、何度でも同じ質問ができるようにしました。



労働生産性の向上



コミュニケーションロボットなし/ありで、入院説明時間を表したグラフです。説明の1/3程度をロボットが行うことで看護師は別の作業を進められ、より多くの患者へ対応が可能となりました。

働き方改革に向けた取組

- 1 コミュニケーションロボットを使うことで説明に割かれる時間が減ります。
- 2 ロボットが説明中、看護師はその患者のデータを確認・点検したり、別の患者に対応することができます。
- 3 何度も繰り返し説明をすることによる看護師のストレスを軽減します。

基本料金と内容

¥ 80,000 / 月定額

うちロボットレンタル費は弊社が負担

ロボット派遣事業に、基本構成の眼科用患者説明アプリをオンプレミスして80,000円/月です。契約期間はロボットレンタル期間に準じます。また病院・クリニックごとに異なる対応が必要な場合、個別に初期設定を行います。眼科専用アプリですが、今後、眼科以外に使用できるよう機能を追加していく予定です。

